

第二期 第二十三号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2018.06.20 定有堂書店 発行

定有堂はどんな本屋ですか？

庭について

死神

椰子の実はどこから？

幻の映画を尋ねて三千里

サッカー

牡丹

ロシア人と一週間の合宿生活

鳥取あれこれ その二十二

丘と白鳥の誘ふ彼方へ

山葵と鯛茶漬け

移動と祝祭と日常

コロボ小説

十二年目のはなし

…… 編集後記

奈良 敏行

坂本 修一

ワタサカソウヘイ

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

五百川 知子

山本千津子

内田 克彦

秦草 梅林

あぎの素生

伊達 文

古賀 啓三

ドラメリア



定有堂はどんな本屋ですか？

奈良 敏行

(定有堂 店主)

三ヶ月ほど先の刊行のようだが、「旅して訪ねる街の本屋ガイド本」の取材案内があった。気後れするという理由で遠慮しようとした。では、自分で自分取材したらどうだろう？と「問い」が投げかけられることとなった。「定有堂はどんな本屋ですか？」という焦点のもとにいくつかの質問を得た。

具体的な面では、本の品揃え、選書の目安やその変化のタイミング、棚作りと読者の関係、など基本的なことながら、自分のためにも一度自分と対話してもいいことだと有難く受けとめた。写真も自分で撮った。以下がその概要だ。

本の構成は、人文書とアート本をメインに考える。街の本屋の構成は「不易流行」という言葉の「不易」と「流行」のバランスを意識することが大事で、メインの人文

書とアート本は「不易」の部分に該当する。「不易」は、昔からの本好きの人たちとつながる分野だ。

一方、従来の本好きとは別のところから本と出合っていく人たちもいる。「流行」の分野だ。エンターテインメントや生き方のヒントのような、いま現在の瞬間風速のただ中の本も新刊コーナーでは、きちんと対応する。ただこの「流行」の範疇は街の本屋では将来の見込めない分野だ。アクセスしやすく品揃えも豊富な大型書店には及ばない。

人文書やアート本は、自分の暮らしの中で、「本」を選ぶことをなによりも楽しみとする人たちに向けたものだ。旅行の途上でふらりと訪れる人も多いが、しばしば「難しい本が揃ってますが、大丈夫ですか？ 買う人がいるんですか？」と声をかけられる。「アクセスしにくい街の本屋に足を運ぶ人は、よほどの本好き。そんな少数派の方が求める本はやはり特殊で、難しそうにみえますが、わざわざ足を運ぶのは、そんな本を求めています」と答える。

本の選び方は、一口にいえば「遅れて売る」。新刊の雑誌は売れないが、バックナンバーはおどろくほど売れる。雑誌は半年たつと出版社でも在庫が消える。どこでも買えるはずのものが「ここ」でしか買えなくなる瞬間だ。「待つことの力」だろうか。書籍もそうだが、「不

易」という範疇はすぐに役立つものではないから、「遅れている」と特性づけることができる。

つまり、ここでは「遅れている」ものを貴重だと感じる人たちになり代わって選書する。「不易」に流行はないが、微妙なグラデーションの変化はある。多くの本は置けないので、ときどき方位や入射角度を変える。ふと「色あせた」という想いに襲われたときに「入れ替え」のタイミングとなる。

棚づくりは読者の人たちとの交流を抜きにしてはできない。「不易」の本はありがたいことに読む人の顔が見える。だから日々お見えになる人たちの読書傾向にむけて仕入れすればいい。うまくマッチングすると、「ここに来るとあるような気がした」と喜んでもらえる。旅の途上でお見えになる方も、だいたい「本好き」「本屋好き」な方々なので、その線上での出合いを留意しようと、コーナーをつくっている。一般的な市場の「流行」でなく、一人ひとりの顔をイメージしながら「棚づくり」をしていくことに努める。

他にも移ろいゆく本屋環境の変化についての問いもあったが、定有堂の基本は駅からつづく商店の軒並みの中ほどに位置する若桜橋のたもとにあることが一番大事だと思う。貴重な「はじまり」だ。人通りが少なくなるといわれるが、はじめから少なかった。で、問題は人と

どう出合うかと考えた。多くの人と出合うのは困難なので、「本を必要とする」ひとと出合うという方針が唯一の課題だった。その方針で現在にいたるまで順調なので、今後の「展開」も棚のグラデーションは変わっても本質は同じことのくり返しだ。

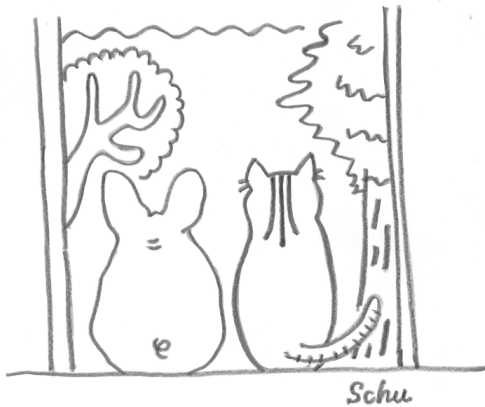
しだいに書店は小さい方がいいと思えるようになった。身の丈で制御できることの大切さ、持続可能な形態は「普通」であること、本業からぶれないこと、が身にしみるようになって、「普通の本屋」という意味を込めて、結局「街の本屋」と名のようになった。

2018. 05. 08



Watercress

猫風閣ギャラリー



庭について

坂本 修一

(猫風閣主人)

わが庭に鰐皮。さつき作つた回文だが出来はよくない。

「庭に鰐」を思いついたのでふくらませた。裏庭には二羽、庭には二羽、鶏がいる。早口言葉だが少しも難しくない。それに、あの方の「には」は「にも」であるべきだ。ほんとうは、助詞を替えるよりむしろ、裏庭の話か庭の話かどちらかにしてほしい。犬は喜び庭駆けまわり。うちの犬は室内犬なので暑さ寒さにとても弱い。散歩に連れて出ても途中で歩かなくなることがある。

*

機嫌が悪いのではない。庭にはいろいろなものがあつたり、いたりするということだ。

どこもかどうかは知らないが、うちの庭では案外浅いところを緑色のガス管が走っている。庭の草創期に、造園業の方が一度、私が一度、つるはしでパイプを打ち破つた。プシューとガスが出た。ガス会社に電話して修理に来てもらうまでの間、気が気ではなかった。ガス会社の人は「やっちゃいました

ね」と、こともなげに言い、パイプにテープを巻いて帰った。存外多い事故なのかもしれない。今、つるはしを使つての作業は稀にしかない。

庭では二度、ガス管が破れる。回文でも早口言葉でもない。

近くに水辺もないのに、ある日突然トノサマガエルが庭に出現した。鳥に落とされたのか。先日はイタチが横切つた。窓から見ていたうちの猫が、ふだん野良猫が通るのとは違う反応を見せた。今のは何だ、という思いがありありと伝わってきた。

*

パルソルとテールブルセットを置いていて、時々庭で食事する。晩年の贅沢だ。それが可能な期間は一年でも思いのほか短い。春と秋のほぼ一カ月ずつくらいだろう。それ以外の期間は、犬と猫と一緒に掃き出しの窓から庭を眺めて楽しんでいる。寒いか暑いからだ。そして蚊が出る。またできた。庭に蚊に鰐。ほんとうにいろんなものがいるものだ。

小鳥や蝶が来て目を楽しませってくれる。鳥は、覚えているかぎりで、ツグミ、メジロ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ヤマガラ、ジョウビタキが来た。珍しいところでは、シメ、シロハラ、メボソムシクイなども来たことがある。スズメももちろん来る。キジバトが白櫛で子育てをしたこともある。子育ては、プルーンにかけた巣箱でシジュウカラもした。

＊

庭のほぼすべてを妻がつくった。アプローチのイメージを描いて業者に示し、その業者が持ってきた敷石の色にはダメを出した。駐車場の施工では隅に二箇所、バラを植える地面を残してもらい、庭ではいくつかの樹を、指定した位置に植えてもらった。そして今、駐車場の壁を這う薔薇は花色のコントラストを生み、庭の樹は奥行きを感じさせる絶好の配置となっている。

園芸の才を英語でグリーンフィンガーというそうだが、妻の指も緑色だった。こわい。

＊

心身の健康にいい、ということ、一年中庭の世話をしている。妻が。

カレル・チャペックの本に『園芸家 12 カ月』があるが、まさにあのとおりで。庭の揺籃期にあたる私の退職前、仕事に出かけるとき庭にいた妻が、仕事から帰っても庭にいるというかもしれない。昼食も忘れて小径をつくったり、植栽したりしていた。花色もだが、葉の色や形、繁り方や大きさをバランスを考えた「配置」を特に重視しているようだ。退職してからは、堆肥を大量に仕入れたり、「これを株分けしてあそこにもつていき……、これとこれを植え替えて……」というのを手伝っている。風知草やギボウシ、ツワブキなどは、株分けして別の場所を充実させることができるほど

大きくなった。

樹も毎年どんどん大きくなるので、脚立で届く大きさに抑えるよう剪定している。三つまたに分かれた枝は真ん中を剪る。枝の途中から垂直に伸びた徒長枝は根元から剪る。外から内に向かう逆枝、懐枝も剪る。交差枝や平行枝は剪るのに迷ったら樹勢の強い方を剪る。いろいろと覚えた。金気（かなけ）を嫌い、剪った箇所から枯れ込む樹種があると聞いたこともあるが、うちの樹たちは強剪定しても頑張る。樹は、太い幹を真横に剪つても、そこが地平になったと思つて平気で芽を出す、とは講演で聴いたポール・スミザー氏の言葉だ。確かに、太い幹を平らに剪つた白樺やヤマモモ、スモークツリーや西洋ニンジンの剪り口の横からは、これでもかというくらい、ひこばえが出ている。

＊

植物は強い。きつと、人類が減んでも繁栄し、地上を覆い尽くすだろう。うちの庭のいくつかの植物たちの命も永劫受け継がれる。人のすることなど、植物にとつては蟻螂の斧のようなものだ。だから、もうしばらくは斧を振り回して遊んでいたい。

庭の斧持ついつもの尾の鰐。庭の斧使うか迂闊の尾の鰐。鰐の庭。

(にゃんぷうかく・しゅじん)

死神

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

川田十夢から、ある日呼び出されて、こんなミッションを受けた。

「テクノ落語というものをつくってほしい」

川田十夢は「通りすがりの天才」を自称する男で、A R三兄弟なるユニットで技術開発を行っている、未来の人。その川田十夢が「テクノコント」という、最先端テクノロジーを使ったコントライブを企画、その中でテクノ落語も発表したいのだという。

お、とても面白そう。やるやる。と軽率に飛びついたが、そこからが苦悩の連続。古典落語「死神」をベースにつくってみよう、と青写真を描いてみたところまではよかったが、よく考えたら落語はすでに完成された演芸。そこにどうやってテクノロジーを足すのか、試行錯誤を

繰り返す。川田十夢に何度も相談し、知人の落語家にアドバイスを幾度ももらい、演者である芸人と稽古を重ね、ようやくわかったのは「テクノロジーは、処理の役割を与えることで機能する」という事実。こうして出来上がったテクノ落語は、このようなものになった。

ひとりの男が座布団に座る。男は落語を演じたことのない、ズブのド素人。「自分が落語をやるなんて、無理だよ…、ん、なんだこれ？」 座布団の下にはiPhoneが。自分の顔をかざすだけで蕎麦やキセルの煙が可視化されるアプリによって、男は落語家になれてしまう。

テクノロジーが落語の不可能を可能へと次々処理していく。男は調子に乗り、ついには禁断のアイコンをタップ、顔認証プログラムによって男の顔は死神のものへと変わる。死神は男に、古典落語「死神」の筋をチュートリアルする。クライマックス、洞窟におびた数人の命のロウソクが並ぶシーンになると、観客の手元のスマホにロウソクの灯りが表示され、会場全体が物語景色へと変わる。「お前の命のロウソクはもうすぐ消える」「なんだよ！」「未来の落語に手を出してしまった、罰さ」「…罪と罰のバランス、おかしいだろ！」「男は慌てふためき、死神に寿命を延ばすための方法を聞く。しかし途中で誤って、大きく息を吹いてしまう。観客のスマホ上

のロウソクたちが、一斉に消える。男は、こときれる…。

つい先日、渋谷で二日間にわたって「テクノコント」は本番上演された。テクノ落語パートも大好評で、万雷と表現して差し支えないほどの拍手をいただいた。私は舞台袖で安堵のため息を吐いた。

今回、「テクノロジーによって演芸を更新させる」という作業に携わって、つくづく感じ入ったことがある。テクノロジーは、人を殺さない。むしろ、人を活かす。

テクノ落語では、蕎麦や死神を座布団一枚の上に可視化させるといふ、本来は落語家の仕事であったものをアブリが奪っている。ところが、いままで人の領域であった部分にテクノロジーが入り込むと、逆に、人にしかできない領域が明確になる。実際、テクノ落語を演じている最中の芸人が全身に纏う凄味や説得力は、相当のものがあつた。身体性の解像度が、明らかに高まっていた。

テクノロジーが人の可能性を更新させる、そして際立たせる。テクノロジーは、けっして未来の死神ではない。

ライブ「テクノコント」では、テクノ落語の他に、もう一本コントを書いた。一切のテクノロジーを使わないコントである。ずっとテクノロジーを使つたコントをライブ内で連射しておいて、唐突に『金ちゃんの仮想通貨

大賞』というタイトルからして非常にくだらない、芸人が身体を使つてふざけるだけのコントを差し込んでみたのだ。私もこのコントでは演者のひとりとして舞台に立つた。人にしかできない表現を明示した時、こんどはなにが起きたか。テクノロジーが舞台袖で、こちらを「勉強させていただきます」みたいな感じで熱心に眺めていたのである。いや、本当に。

その時、私はやつと理解した。「テクノコント」において、テクノロジーは共演者だったのである。

テクノロジーと人間は、共に成長していける。それを実感した「テクノコント」。中日の回では「ゴキウ」の動作が悪くなり、ARがカクカクと表示されるなどのトラブルが起こつた。演者たちは咄嗟のアドリブで、彼の不調をフォローした。「あいつも緊張で身体が堅くなること、あるんですね」なんてアフタートークで喋つたりした。いまやテクノロジーは、私にとって、同じ釜の飯を食べた同志である。



ヤポネシア ② 椰子の実はどこから?

芝野 浩貴
(地球探家)

八岐のオロジ退治は山民族対稲作族の対立からおこったのか? 縄文人が弥生人に追われて山へ逃げたのか? 平地人、山民(定住)、山人(移住)と分類した柳田国男が、山人のルーツを台湾の高砂族? といったときの根拠は、南方熊楠との山人論争にあるのか? 更に、柳田国男が島崎藤村に話した椰子の実はどこからやって来たのか?

日本列島が今より隆起していて、大陸と繋がっていたとき、北は樺太千島から、西は朝鮮半島から渡来してきたとして、南方はどこからやってきたのか? サハラ砂漠を越えてヨーロッパに行かずに、インドを経て中国大陸の東端まで来た後、フィリピン、オーストラリアから最後はニューギランドへ移動したグループと別れて黒潮にのり、椰子の実と共にやって来た日本人の南方系祖先。グレートジャニーの海への道ハブである台湾へ昨年冬行ってきた。ナバホ語が戦時中に米兵の暗号となったのとは逆に、台湾の場合は、多民族で異なる原住民のコミニケー

ションの言葉として日本語を使ってきた。日本兵の原住民の接し方より国民党の原住民への対応が残酷で、私腹を肥やしてのさばる太ったブタ(国民党)よりは、まだ監督監視して威張る犬(日本兵)の方がマシだと揶揄されたい。世界で一番の親日家が多い国で、安心して住める感じはあった。これまでに訪れた国々と比べてエキゾチック感はまだ感じなかった。ヤポネシアを回遊していると、この数年、どの都道府県にしようがアジアの観光客と出会うばかりで、アジア日本の感覚になっているのかもしれない。IT王国でもあり、 Weibo も至る所にあり、台湾版SinaやDOCAもあり、交通、食事などの支払いには「ピ」で終わってしまう。平地としては、台北、台中、高雄に集中し、残りは富士山より高い玉山をはじめとする3000m級の山脈が島を縦断。東部は海岸線だから、観光客の多くは上の3つの街巡りが大多数。九州と同じくらいの大きさだから、島一周はそう難しくはない。日本統治時代に、衛生管理で熱帯病を撲滅させ、インフラ(鉄道・下水・治水など)を整備し、教育を根付かせたからであろう。

〓 知者は水を好み、仁者は山を好む(論語)

非情城市(1989年)という映画で第2次世界大戦後から二・二八事件勃発までの社会混乱を描いているが、そのロケ地の九份を訪れた。(リアルタイムでは観てないが、今年5月、都内の台湾映画傑作選祭りに参加して鑑賞した。戒厳令下の中で映画製作の苦悩やこの映画への批判など、監督のホウ・シャオ

シエンと親交の深い翻訳家の田村志津枝さんから裏話も伺った。名前の由来は、開墾した土地を九軒の家で九等分したから。島北部の港町の近郊の山あいの町で海も見える。ジブリ側は否定しているが、宮崎駿映画をも想起させるらしい。三鷹の森は、玉川上水・井の頭池。鞆の浦は、瀬戸内海。屋久島は、川・滝・大雨。水が風景を生むが、この日は大雨でびしょ濡れとなった。坂を降りていつて雨宿りしたところが、偶然有名な阿妹茶酒館(アーメイチャージウグアン)だった。お茶代300元を払って、台湾茶研修。お湯をかけて茶道具を温める。茶壺に茶葉をいれる。香りを楽しんでからいただく。(低地が濃さで高地が香りを産むのか茶海、茶壺、茶杯、聞香杯など器が多く、香道と茶道を合わせた感じだ。夜には士林の夜市に行ってみた。国際色豊かで、足の踏み場もないくらい賑わっていたが、一番の人氣は、台湾料理でも韓国料理でもなく、堺商人・博多商人譲りの日本人経営のエリンギ焼きだった。

孫文が満州を明け渡したこと、蒋介石の国民党としての評判を考えると、本省人や台湾民族の人は二人をどう評価しているのだろうかと思ったが、孫文記念館と中正紀念堂蒋介石紀念堂を訪れた感じでは尊敬されていた。両館とも衛兵が護衛している。二人とも日本で学び、政治家に必要な事として学芸を重んじる事を挙げている。「例えば、1908-1910 日本の振武学校時代の蒋介石の数学ノート展示(円に内接する6角形で2組の対辺が平行ならば、残りの一組の対辺も並行であるこ

とを証明していた」

国家図書館に寄ってみた。日本の図書館と少し分類がずれていた。(200 宗教、300 科学、400 応用科学、500 社会科学、600 中国史、700 世界史、800 言語・文学、900 芸術)

その後、誠品書店というブックスストリートを散策。淡水信義線のほぼ2駅が地下でその半分くらいを占める。草間彌生、安藤忠雄の本が目立つ。「いきの構造」も売れている。東海道、中山道の本も11月に出版されたばかり。語学も観光も文学も日本関係が多い。

台湾の人が親日なのは、台湾総督府民政長官であった後藤新平の影響もあると思う。鶴見和子と鶴見俊輔の祖父でもある後藤の自治三訣である「人の世話をし、人の世話にならず、酬を求めず」という杉原千畝にも影響を与えたこの言葉は、東北震災時に台湾の一早い支援活動として実践されている。時事問題として、南北統一朝鮮、中国台湾問題があるが、2500 万年前まで、人類が旅をする遙か昔、日本・朝鮮・台湾・中国は同じ大陸にあった。今回は自然探究というより歴史・人的遺産確認(最後は故宮博物館)で終わったが、真の目的は次なる地、沖縄へ移動する時に黒潮の道を感じることもあった。

幻の映画を尋ねて三千里

ムラカミ ヒロミ

〈フライング・ブックマン〉

長年、気になっている映画がある、というか、あった。というのも、先日、あるきっかけであっけなく氷解してしまっただからである。

子供（男の子）が主人公の洋画である。

父親だったか母親だったか、家族を探して鉄道で（あるいは鉄道沿線を）旅する話。

劇中、駅の構内（ヤード）で「ワルソー、ワルソー」と行き先を尋ねる場面があった。たぶん、見たのは小学校低学年の頃。

自分でねだったとは思えないので、学校（の引率）で見たか、別の映画の併映作品と思われる。

記憶の中のデータは、これだけである。

是が非でも見たい程ではなく、さりとして喉の奥に小骨があるような落ち着かない気持ちのまま、徒に日を過ご

してきたが、冒頭で触れたとおり、ひよんな所から、ボタ餅が落ちてきた。

最近届いた古書店の目録に、映画ポスターの写真があり、あっ、これだ！というものがあつたのだ。

併映作品を二つ並べたB二ポスターで、殆ど見かけないタイプのものである。併映が有名作品だから良かった。この映画単独のポスターだったら、たぶん、店には並んでも、目録にまでは載らなかっただろう。

題名は「小さい逃亡者」、聞いたことないでしょ？

筆者も、この題名に全く記憶がなかった。

マーク・レスターの「小さな目撃者」は知っているが。

公開は昭和四十一年十二月（見たのは、翌年の春だったように思う。以前は、地方上映は東京封切から何か月か遅れるのが当たり前だった）、併映は「大怪獣空中戦ガメラ対ギヤオス」で、当然こっちがメインであった。

ギヤオスの印象が強すぎて、題名さえも覚えていなかった。退屈な映画は、実は大作であって、戦後初（ということとは、事実上、史上初。戦前に、公式ではない作品はあるようだ）の日ソ合作映画。監督は衣笠貞之助（！）とエドワルト・ボチャロフ（聞いたことがない）。

主役が稲吉千春。ポスターの顔を眺めていて、どこか

で見たような顔だなあ、と調べてみると、「ウルトラマン」に出演していた。「怪獣殿下」である。

脇役陣も豪華。

宇津井健、宇野重吉、船越英二、藤巻潤、殿山泰司、京マチ子……

物語は、こうである。

主人公の少年は、両親を亡くし、叔父に引き取られている。叔父はヴァイオリンの流しをしており、少年もそれを手伝っている。その叔父から、父親がモスクワで生きている、と聞かされ、少年は、ソ連船に密航してナホトカに渡り、シベリア鉄道沿いに延々モスクワまでの旅をするというもの。父をたずねて一万キロである。

合作映画だから当然なのだが、とにかくソ連の人々が上も下もみな親切である。不法入国の外国人にも拘わらず、何やかやと世話を焼かれて、モスクワまで辿り着く。大使館の調査で、結局、父親は死亡していたことが分かるが、そのままロシア人夫婦に引き取られ、音楽学校に入り、ヴァイオリニストとしてモスクワ室内管弦楽団と共に来日するというラストである。

どうも、記憶のすり替えか、「モスコ」を「ワルソー」と覚え間違えていたのが、探せなかった原因のひとつ。

ポーランドが舞台、という映画はそうそうあるものではない。まして、子供向けの映画では。

確かに、ヤードの中のシーンはあったが、それは鉄道員の目を避けて逃げ回っている所であり、「モスコ」の台詞も、目的地に到着して、キオスクの店員に「ここはモスクワか？」というつもりで尋ねている場面だった。

その台詞から、外国人の男の子が主人公だった、と思い込み、洋画ばかりを探していたのが原因のふたつ。洋画というのは、半分正しかったのですがね。小学生の頃に、自ら洋画を見たいと思ったことはなかった筈なので、学校がらみと考えてしまったのが、先に進めなかった敗因だろう。

他人様に頼まれる調べものでは、記憶がどれほど当てにならないかを、さんざん痛感している癖に、自分の場合は、何ひとつ疑問に感じないのだから世話はない。記憶というものは、つくづく作られるものなのだなあ、と感じた半世紀ぶりの出来事であった。

それにしても、なぜ、ワルソーだったのか、こればかりは今もって不思議でならないのだが。

サッカー

坪井日記 ⑤

齊藤仁昭

(長崎書店)

アンドレス・イニエスタ、ジャンルイジ・ブッフオン、フェルナンド・トーレスらがそれぞれの所属クラブでのラストマッチを終えた。20年以上バルサ一筋だったイニエスタ。八百長問題で2部に降格してもクラブに残り続け今季の7連覇に絶大な貢献をしたブッフオン。紆余曲折を経て愛するアトレチコに帰り、控えになっても決して腐らずクラブへの愛情と忠誠を示したトーレス。惜しまれながらも盛大な拍手でファンに見送られる最終節の風景は彼らにふさわしいものだった。

サッカー部でもなかったし、自分でプレイしたこともほとんどないサッカーだけれど、学生時代のアルバイト先でワールドカップ優勝国を予想する遊びに参加して以来、特に欧州のサッカー文化に嵌ってしまいほぼ毎日欠

かさずサッカーニュースをチェックしている。文字と写真で情報を得るばかりで、試合の中継を熱心に観るわけでもなく、Jリーグにも最前に行っているチームがないのでモグリファンだと自分でも思うが、各国の各チームの歴史や伝統、スタイルや選手の育成方法、地理的情報などに熱中している。イタリアは北部と南部でカルチャーが違ふことや、カタールニヤやスペインの歴史、フランス植民地のことや移民のことなど全てサッカーをきっかけで知ることができた。親子三代で同じチームを応援するだとか、労働者のアヘンと呼ばれるほどに人々の生活に浸透しているところにも惹かれてしまう。

人種差別は未だ根強く、心無いファンによる特に黒人選手へのヤジが毎シーズン必ず発生する。それをやってしまう選手も少なからず存在する。しかし多くのクラブや選手は差別に對し毅然とした態度を取る。差別行為を行った人物が特定できればその処罰は重い。人権に対する意識もサッカーから学んできたと思っている。

選手や監督のインタビュも面白い。聞かれた質問に真摯に答え、クラブの伝統や、自信の感情や情熱を様々な言葉で語る様に、成熟した社会人として責任を立派に全うしようとする態度が伺える。トーレス退団に際し監

督のシメオネが言った言葉はこうだ。「すべては事実がひとりでに物語る。トーレスがアトレチコに帰還を果たした時の光景は見たことがないものだった。そして、今回の（退団）セレモニも同様だった。彼が残していくもの、それは努力し、決してあきらめずに競争し続ける姿勢だ。おそらく、私たちは再び巡り合うだろう。」文学的ですね。すべては事実が物語る、とか言ってみて。聞かれたことにはまったく答えずに更に聞いてもいないことを延々としゃべる世界の端っこになってしまったところかの国の偉い人に学んでいただきたい。

イニエスタはヴィッセル神戸への入団が決まったそう
だ。ついさつき入団会見の中継を見ていたが、アンドレ「ア」・イニエスタ選手を紹介しますとのアナウンスの後に絶望的にショボショボな音楽が流れたときに悲しい気持ちになってしまったが、バルセロナの練習方法や哲学、彼のすべてを簡単に思わせてしまう研ぎ澄まされた技術を間近で見ることがするのは素晴らしいチャンスだ。川崎フロンターレと神戸の試合が観たい！トーレスは鳥栖に来るといふ噂もあるけど本当だろうか。フォルランが日本に来たときは随分と悲しい思いをしているように見えた。あのようなことがないといいけれど。

*

灰色が胸を張つてら 緑色でかい面してら
うなるようなはねるような 夢ばかり見てるような

紅いフロア駆け回つてる あいつまた空を飛んでる
お静かに 雨のように 終わりにだけ告げる鐘が

声色を変えて飛んでく ミサイルが耳をつんざく
ドライブをかけて鳴く ビニールの風に乗り

前触れを知りたがつてる あの娘また指を噛んでる
お静かに雨のように 終わりにだけ告げる鐘が

甘い息をまぜて漂う

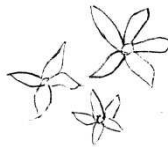
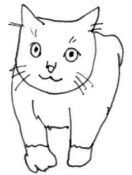
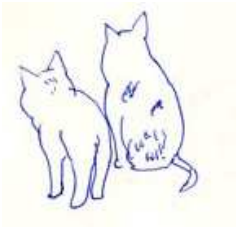
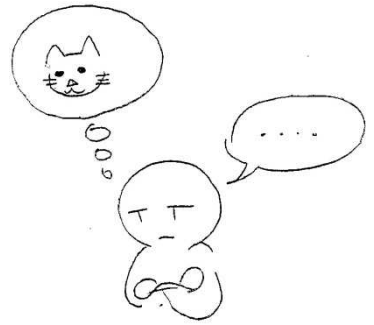
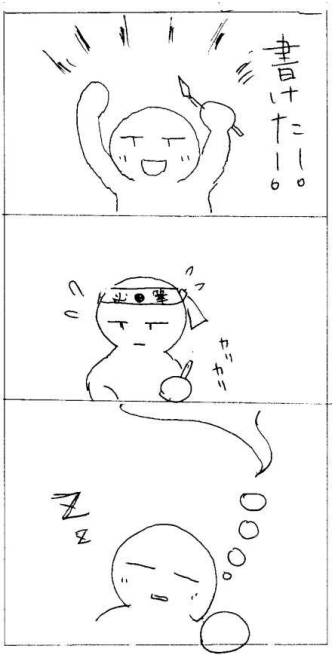
長いメロディーが

丸い光を床に投げて笑う

でかいプロウの波が引いたら 歌いだすスネアビートが
替え歌のスキル抱く ペテン師に蹴りを入れ

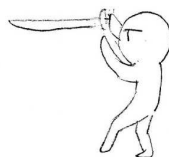
片をそろって背負つてる 旅人の夜の賛美歌
お静かに雨のように 終わりにだけ告げる鐘が

（ケバブジョンソン『終わりの鐘と紅い部屋』作詞・杉浦真寛）



一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階



牡丹

伴奏にはみ出す声も端午の日

黒土にあでやかなりし牡丹園

白牡丹花の窪みに散りし蕊

瑞風といふ列車見送る五月

夏めくや白き洋館描く人

五百川 知子

アシル



ロシア人と一週間の合宿生活



山本 千津子

(KOWKA コーシカ)

一九九〇年代、私はロシアのウラジオストクに住んでいた。一部屋を間借りしてホームステイをしていたこともあるし、フルシチョフカと呼ばれる五階建て集合住宅の二階にキッチン付きワンルームを借りて住んでいたこともある。ロシア人宅に遊びに行つて帰りが遅くなると、泊めてもらうこともしばしばあった。座っていたソファアが一瞬にしてベッドになったので、気兼ねなく泊めてもらった。ダーチャに行つても長くて二泊、住んだ、住んだと言つてもロシア人と一緒に共同生活をしたことがなかったことに改めて気づかされた。

マンションでロシア人との共同生活を体験したからだ。彼らはモスクワからインターネットで申し込み、十二人のうち私も数に入っているのので宿泊代は気にしなくていい、とは言われていたものの、同室のメンバーは七十二歳の女性、四十代の男性と女性、三十代の女性と私の計五人、ダブルベッドは四台、細身の四十代女性と一緒のベッドに身体を固めて毎晩横向きに寝ていた。

彼らの滞在目的は、合気道を日本人の先生から学び、空いた時間に観光。私は道場やショッピング、観光地に付き添った。合気道の稽古は午前中だったり、夜だったり、からだを動かしている彼らは汗をかいているが、裸足で突っ立っている私は、窓からの風をまともに受けて震えるばかり。稽古の後に食べる彼らの量と私の食欲は大違い。スーパーで買った和食のお総菜、豆腐、てんぷら、焼き鳥、から揚げ、コロッケ、タケノコなど季節野菜の煮物、次々とお腹に入れていき、ちくわやかまぼこは魚のソーセージと名付けていた。主食はおにぎりやお寿司。カップラーメンを食べ比べる彼らのおかげで、こんなに多種類のカップ麺があることを知った。甘味は大福とかりんとうが、常にテーブルの上にあった。お酒を飲むとなると、ロシアから持ってきた黒パン、サラミとサーラ（豚の脂身を塩漬けにしたもの）が各部屋の冷蔵庫

というのも、この四月に一週間、1LDKのウイクリー

庫から出てくる。2リットルの日本酒パックは欠かせない。日本のお酒ではなく、水のおかげで肌はすべすべ、髪の毛と爪の伸びるのが早いと言っていた。

ショッピングは、ほとんどが友人から頼まれたものだ。ドラッグストアでサプリメントを中心に目薬や消炎剤などスマートフォンで写真を見せながら探し回る。内服薬には慎重だった。自分たちが風邪をひいたり、結膜炎になったり、胃腸の具合が悪くなっても、西洋の薬は一切いらないと言って私の勧めを断り、のど飴をなめる、緑茶や紅茶で目を何度も洗う、炭入りの漢方薬を探すといった具合だ。そういえば、ウラジオストクに住んでいた時、ロシア人から真っ黒な炭の薬をもらい、症状にあわせた薬草と蜂蜜で作られた煎じ薬をもらい、辛子のシップをしてもらったことを思い出す。徹底して自己免疫力というか、気合いで治してしまう彼らには驚いた。合気道のおかげなのか。

一番に訪れたい観光地は京都でも奈良でもなく、赤穂ときた。「四十七人の浪人」と言った時には、私はすぐに理解できなかった。ローニンの発音がロシア語風に巻き舌だったせいもあるが……私の頭の中に赤穂はなかった。帰国前に上野公園で必ずラストサムライの銅像を見

なければならぬとも言っていた。日本人以上に武士道についても勉強している上、その精神も理解しているというか、理解しようと努めていることが、彼らの会話から感じられた。日本文化も武士道も、努力して身につけようとする外国人の中で受け継がれていくのだろうか、と思った。

彼らは共同生活に慣れているのだろう。シャワーやトイレ、洗面所の順番を待つともなくスムーズに使っていた。食事の準備、後かたづけや掃除と気のついた人がやっていた。お互いが邪魔になることなく、ただ一人私だけが空気を読めていなかった気がする。みんなに合わせるのではなく、個人がそれぞれに好きなようにしていながら、それでいて誰もストレスを感じないで居心地よく生活できるのも、合気道で培った気を合わせる技なのか。

彼らを見送ってからの私は、連日三十八度以上の熱に苦しみ、咳も止まらず、抗菌薬に頼って寝込んでしまった。合宿に続いて、今までにないゴールデンウィークの思い出となった。



鳥取あれこれ その二十二

内田克彦

(地域研究家)

「碧川かた研究会」に参加し、かたの生涯を調べている。かたの活動は、禁酒運動と女性参政権運動に代表されるが、これまで発表された論文・書籍等では当時の資料に基づいてどんな仲間・組織で活動していたのかの記述がみられないので、私なりに調べてみることにした。

まず、一九九六年に発刊された『日本女性運動資料集成第1巻思想・政治I 女性解放思想の展開と婦人参政権運動』の「人名索引」を見ると「碧川かた子」の名前で多くの頁に頻出しており、「婦人社会問題研究会」の項で、禁酒運動について『新眞婦人』から引用されていた。

県立図書館で、『新眞婦人』の現物をリクエストしたところ、一九八〇年出版の復刻版が館内蔵書にあった。『付録』に記載されている「人名索引」に基づき名前を追ってみると、一九一六（大正五）年四月号の「音信」欄に、次の記事が名前入りで掲載されていた。

▲碧川かた子様より 拜啓御一同様御無事に御暮被遊候や奉伺候日頃のご無さた平にお許るし給り度願
上候扱て私最愛の長女事一月から風にかゝり長引き
候結果此頃に至りて肺にならぬとのみに相成候(略)

かたが四女で末子の清を産んだのは一九一二年であるが、四年後の一六年には『新眞婦人』の購読者になっていたことがわかった。

『新眞婦人』は、岡野幸江著「解説」によれば、「ジャーナリズムがこぞつて新眞婦人会は青鞥社に対立してできたと報じた」が、『青鞥』が文芸誌を銘打っているのに対し、『新眞婦人』の方は婦人問題の研究を目的にした啓蒙的性格が強い雑誌であり、広く社会的実践にも道を開こうとしたものであった」とされており、一九一三年五月から一三年九月関東震災により第一二四号で終刊となるまで、西川文子が「発行兼編輯人及印刷人」である。文子の夫は光二郎で、かたの夫である企救男とは東京専門学校と同級生であるため、その縁で誘われたのであろうか。

西川文子は、婦人社会問題研究会を立ち上げ、一九二〇（大正九）年二月一四日、婦人社会問題講演会を開催し、『新眞婦人』三月号に「婦人と社会問題」と題する自らの講演を、四月号には與謝野晶子の講演筆記「女子の社会問題研究」等を掲載している。

さらに、二〇年十二月号の目次には、かたの名前が次のとおり掲げられている。

(前略)

飲酒制限運動日記 高木富代子 (一七)

訪 問 記 碧川かた子 (一八)

梅田あき子

路傍宣伝の記 碧川かた子 (二一)

(後略)

「日記」及び「訪問記」には、二〇年一〇月八日から二三日までの訪問先及びその結果が具体的に記述されており、高木記一〇月九日付けには次の記述がある。

中食を終へて再び正門を入り法学部に行き吉野作造先生に刺を通じて来意を述べると、之れは良い思ひ附ですが、法律案として出されるのなら私の年来の持論として御賛成は出来ません、(略)御高説を伺ひ、碧川夫人とは矢張旧知の間柄との事なりしも遂に賛成を得る事出来ざりき。

かたが東京帝大病院で看護婦をしていた時に受洗した弓町本郷教会には、当時帝大の学生だった吉野作造も出入りしてい

たので、それ以来の再会ということになろう。

かたは、十一月一日、明治神宮の鎮座祭でのビラ配りを臨場感溢れる文章で書いており、「松竹の方々が覚えて私等をフィルムの中へと納めてしまった。」とあった。

因みに、この日息子の道夫がカメラを回しており、その姿を、後年『カメラマンの映画史』に記述している。

また、文末に載せている「十一月一日、二日路傍で配布したる宣伝紙の文字」の末尾に、かたの名前が

発 起 婦人社会問題研究会

禁酒部
幹 事

西川文子
碧川かた子
高木ふよ子
早川幸登子
梅田あき子

とあるのは初見であった。新眞婦人社内にあった婦人社会問題研究会の禁酒部に属して活動していたのである。

(以下、続く)

二〇一八、五、二五

丘と白鳥の誘と彼方へ

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

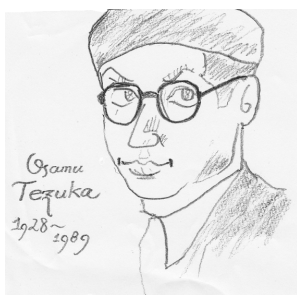
「そこに一つの丘がある。灰色の草が鬱蒼と茂り、その向こうには、深い霧に包まれた無限の原野が：こんな景色を、あなたはふっと思い出した事は無いだろうか？」
…物語は斯く始まる。イングリッシュホルン、名とは違ひ、角笛では無く大型のオーボエのやうな木管楽器・曲がったリードが特徴的、鳥の嘴のやう。音を創るのが大層難儀な其れはしかし、心の琴線を掻き鳴らす美音故に数々の作曲家達に憧れを抱かせて来た。物語もそんな笛の、息の長いカンティレーナに誘はれいきなりの波紋を投げかける：「私の名はルンリジエム：住んでる村は：ベトナム：リエンタ村……帰りたい！そこにあたしの家があるの」…或る日突然、家族の者の意識が遙か彼方へ連れ去られて仕舞う、幼い者の命がどこかに攫はれ行く？謂れ無き恐怖：「目の前に浮かんで来るよ：大きな枯れ

木・崩れた石の壁なんだ…その壁はね：僕んちの壁なんだよ」…手塚はピアノの名手だった。音楽に執着を見せ、ベートホーフエンの人物像を克明に描ひた「ルードウィヒ・B」等漫画やアニメに樂の息吹は絶へなひ。此の物語でも「トウオネラの白鳥」の曲、其れも或る演奏にだけ！反応すると云ふ凝った設定・創作上のキャストである老樂匠のレコードに。…前世を共にする世界各地に散らばった9歳の子ども達が「トウオネラ」の演奏に誘はれ集ひまるで「ハンメルンの事例」のやうに同じ場所を目指しての急展開：「見えるよ…南側に小さな小川があるよ…あの小川でよく遊んだ：すばしっこくて綺麗な魚がいたつけ」…そこには作品成立時の社会情勢が色濃く反映され、作家の云はれなき暴力や理不尽への憤り、平和への希求が。僅か30数頁の掌編、凝縮された数々の訴へに心揺さぶられる：「ここは私達の家庭よ俺達は平和だったな。みんな楽しく暮らしていたんだ、こうやって…あのベトコン狩りさえなければ…」悲劇の匂ひ強く死のイメージ立ち込める物語。白鳥の姿、あくまでも優雅でたおやかに羽ばたくその俤は「火の鳥」のそれにも似て。…巧妙に張り巡らせられた幾つかの伏線。主人公の兄は、あどけない弟の苦悶に焦燥を募らせる。「…死の世界の事はつきり覚えて居ます。突然、私の目の前に丘が現れました。そこには灰色の草が茂り…そして、そ

の向こうはゾツとするような無の世界でした。」白鳥の姿を表現し得なひ、芸術上の悩み故に死の淵を彷徨ひ九死に一生を得た老楽匠。今漸く獲得された演奏が、今度は図らずも悲劇の連鎖を引き起こして、了った責任を痛感し、人の生命と魂、宿命の不可思議に翻弄されつつ読者と共に行く末を窺っている：「直感的に私は、此の丘はもしかしたら生と死の境界に違いないと悟りました。そうです、そこは無の丘：つまり0次元の丘だったのです」儚い音楽は、溜め息や涙も尽き果て歌の翼を畳む：切ない笛、弦のトレモロ、ピツィカートに乗り、揺れ：消えやがて独奏チェロを軸にした深い低弦の調べ、厳かなティムパニが終末を告ぐる：シベリウスの旋法はアジア的なホモフォニーとアルカイックな響き。幾つもの次元の垣根、生死や夢・現をさへ超へて移らひ彷徨ふ：人の意識に最終的な語りかけが出来るのは唯樂のサンボリズム。其の音楽を、こんな物語に閉じ込め逝った手塚。僕らもいつか或ひは・他の寓話にそれを亦シンクロさせ：鳥の翔ける樂に誘はれ行くだらうか？ 猶、気高さを喪ふ事なく悠然と舞う白鳥：「未知の空、そこに一つの丘があつて、灰色の草の鬱蒼と茂る：丘の向かう、深い霧に包まれた無限の野：」其れは遠い日の記憶、それとも……？

2018.03.27

画. A. T



「今回のテキスト」 手塚治虫 「0次元の丘」 手塚治虫名
作品集5集英社文庫等
「其の一枚」 「シベリウス「トゥオネラの白鳥」 四つの伝説
作品22より」 ミサージェント指揮 管弦楽団他

山葵と鯛茶漬け

あきの素生

(くうねるめがね)



蕎麦を食べに行つたときのことだ。それは、山道をずつと登つて行つたところにある蕎麦屋で、今はもうやつていない。行つてみたいと思つていながらなかなか機会がなく、営業終了する少し前に、一度だけ訪れることができた。

旨いと評判の蕎麦は、たしかに自分の知つてゐる蕎麦とはまったく違つたと思う。白く、細く、繊細で、ざる2枚をつるつるべろりと食べた。でも、やつとこの店に来ることができたという高揚と緊張が、その味の記憶を霞ませている気がする。なんだかとても曖昧なのだ。勿体ないことに。

その中で、くつきり印象に残つてゐるものがある。山葵だ。蕎麦についてきた山葵が、とんでもなくおいしかったのだ。

蕎麦に少しだけ載せ、つゆにくぐらせて食べると、花

のような甘い香りがふわつと鼻に抜ける。「つーん」なんてしない。でも、花のように無防備に、まるきり親しめる風ではなく、どこかきりりとしてゐる。一筋縄ではないかない感じ。甘いだけじゃないぜ。それが癖になる。ああ、おいしい山葵つて、こんなにおいしいんだと、舌足らずに思つた。

それ以来、蕎麦に限らず、店で山葵が出てくると、思わずじつと見てしまう。あの時みたいな山葵かもしれないと、わくわくしながら口に運ぶ。ふわつ、きりりに出会えたときには、一人にまにましながら、刺身やなんかと喜びを噛みしめる。

そうこうしてゐるうちに、家でも、例えば肉に山葵をつけて食べるようになった。塩と山葵でさっぱりと。山葵醤油でこっくりと。なんだかいっぱしの大人になった気にさえなる。気のせいだが、家で食べる山葵には、つーんとなることもままあるけれど、簡単に言つてしまえば、すつかり山葵にはまつてゐるのだ。

山葵を載せていただく料理に、鯛茶漬けがある。いつ頃だったか、母が、雑誌に載つていたと言つて突然作つてくれた。家族全員で舌鼓を打つたが、なんと言つても「鯛」、そうそうは食べられない。しかも、せっかくの刺身を茶漬けにしようというのだ。いろいろな条件(お

値打ちの鯛の刺身、まあ今日は刺身じゃなくてもいいよという家族全員の合意などをクリアしなければ、作ることでできない料理である。鯛茶漬は、我が家のごちそうになった。

家を出て数年経つ。金曜日の仕事帰り、スーパーに行ったときは、刺身コーナーに立ち寄る。そこに鯛の刺身があったら、翌朝の幸せは約束されたようなものだ。休日の朝の鯛茶漬は、自分へのご褒美。遅い時間まで鯛の刺身が残っていることは滅多にない。だからこそ、手に入れたときは本当にうれしい。

手のかかる料理でなし、平日だつていいのかもしれない。でも、せっかくだから、時間を気にせず味わいたい。なので、休日にしか食べない。

温かいご飯の上に、鯛の刺身を3〜4切れ載せる。粉末の昆布茶をふりかけ、そこにゆっくり熱い湯を注ぐ。透きとおった鯛の身がうつすら白くなる。端っこがきゅつと縮むのは、湯に旨味が溶け出ているしのような気がする。見ているうちに口が緩む。もみのりと煎りごまをちらし、最後に山葵を載せる。お好みで醤油を入れてもいい。

山葵を溶かし、鯛の身をほぐしながら、ごはんと一緒にかきこむ。鯛の出汁は格別だ。生臭さとは無縁で、上品な脂が味を丸くしている。

ここに、あの山葵を載せることができた。鯛茶漬を食べるときは、必ず蕎麦屋で食べた山葵を思い出す。でも、不思議なことに、それを想像するだけで、満たされている自分がある。どんなにおいしだろうと思いつかべることが、案外よい薬味なのかもしれない。



(イラスト・あきの素生)

移動と祝祭と日常

伊達文

(人生休憩中／ノージャンルイベント)

ひよんなことから、目的地を決めずに出かけることになった。明日いる都市が決まっていないのは、なかなかいいものだ。

思いのほか荷物が増えたので、新宿でキャリーケースを買う算段で出発したが、売り場に着いてみると、キャリーケースとは思ったより高いものだった。まあ、移動している間だけだし、重いのは。と考え、買わずにバスに乗った。

買わないまま旅を終えるつもりが、夜行バスを降りた早朝、駅までの道を歩いていた。中古のキャリーケースを売っているお店が開いていた。説明が詳しく値段も良心的だったのと、20年使われたが綺麗なほど丈夫な品ということで、なんだかいいなあとと思い、購入した。

20年。どこかの誰かが。いつもではないにしろ、この

キャリーケースを使っていた。そこには想像の余地がある。ぴしっと埋め尽くされてなくて隙間のある感じが、私は好きなのかもしれない。

お店で朝食を食べながら、ガラス張りの向こうを歩く、見知らぬ通勤者たちを眺めていた。

やがて新しい客が入り、私の真正面の席に座る。店員が近寄り静かな声で注文を聞いたあと、「トーストとゆで卵！ ゆうてるやる！」という、男性の大きな声が響く。一瞬で、私の体が緊張する。男性が、まったく気づかない間に。一生、気づかない間に。

これまで私は、自分がこんなふうに気づかないうちに誰かに暴力をふるってしまう可能性を減らすことをずつと試みてきたのだけれど、最近、自分を守る努力の比率を上げないとな、などと考えている。

都市が決まっていなかったのだから当然決めていなかった宿も当日決めて、温泉入り放題のカプセルホテルに泊まった。観光はほとんどしなかった。ちょうど最近読んだdhsさんの『ひきこもらない』の中に、移動していつもと同じようにインターネットと読書をする話が出てきた。お金も時間も、私たちが使ったり持ったりする何もかもが、何かを達成するために上手に活用すべきものに

なりがちだけれど、達成とは無縁にお金や時間を使うゆつたりさを手放したくない。それは競争を降りるということとかかもしれないけれど、私は、「別のゲームをする」という呼び方をしている。結果的に何かを達成しても別にいいのだけど、私にとっては、それよりも大事なことがある。

4月は、久しぶりに複数の友達に会った。会ったあとは、神経が興奮して心臓がばくばくしたり、なかなか眠れなかったりしながら、会っては話し、笑い、ときには泣いた。

新しい試みとして、文化圏の違う人と接して齟齬が生じた際には「あなたたちにとつてゝすることがお作法なのは知ってますが、私はそれはやらないです」とか「私とあなたはだいぶ文化圏（コミュニケーションの取り方など）が違うので、本当はいろんなことに擦り合わせが必要なんです。今まで黙って合わせてたけど、嫌だからもうやりません。合意ラインを擦り合わせるコミュニケーションをする気がないなら、私と友達を続けるのは無理です」という話をしてみたりもした。擦り合わせが明白に無理だったり、擦り合わせたいと思わない相手とは即棲み分けに移ったほうがいいと思うし、説明せざるをえない側の手間が膨大な場合、あきらめてもいいと思うけ

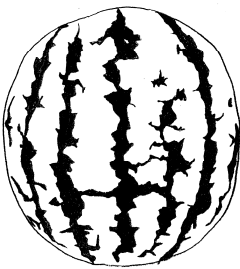
れど。

精神が大規模に潰れたとき、すでに大潰れしたことがある人が、「自分は潰れてからがよかった」という言葉を零した。それは私の心の支えの一つになった。

誰もが、「潰れたあとのほうがよかった」になっっていくわけではない。そのまま逝った仲間たちもいるし、それは特別なことではない。

できるなら、潰れる前に方向を転換したほうがいい。はじめから、自分を大事にすればいい。すでにさまざまに無自覚に自分が傷んだあとで、私はようやく、いくつかのことを辞める決断をした。

Xigua



コラボ小説

土賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

芸術は芸術を模倣するが、余りにも目覚しく、触れた者に激しい衝撃と陶酔を与えるものの、間を置かず訪れる劣等感と無力感も深遠、といったタイプの芸術も存在する。

奥泉光の作品は、新作を手取る度に、この精神の上昇と墜落のダイコトミーを味わせてくれるが、今回の「雪の階（きざはし）」も例外ではない。

太平洋戦争前後を作品の時代背景とするのは、過去五年ほどの、作者の円熟期への移行と重なっているが、僕と同年代（二歳上）なのに、まるで見てきたかのような、実しやかな時代精神の、擬古的な文体による描写や、三人称で書かれているのに、その弱点と思われるぎこちなさを感じさせぬ滑らかさと饒舌さで、作中人物の内面が、くるくると移り変わる視点で語られ、わくこれ絶対ムリ、と笑い泣きになってしまふ。

この時代設定を、完全虚構を目指す作家が、自分に課した「縛り」だと考えるのは穿ち過ぎであろうか。自分の実体験では知り得ない状況を小説世界とすることで、逆に小説世界を無限化するのである。

この作家にも初期の作品には同時代の知識人の体験を題材としたものがあり、それは筆者の実体験を写しているかのようであったが、これでは小説世界が狭隘化してしまう、と危惧したのではないだろうか。そこで完全虚構を強いる「縛り」を思いつく。面白いのは純文学色が強いのは前者であること。ウエル・メイドで、（ミステリやオカルト的要素も盛り込まれた）エンターテインングで、大部である、と小説の王道のような姿に進化している今の状態では恐らく芥川賞は取れてなかっただろうことも面妖だが面白い。

巨人の偉業を目の当たりにすることによる自意識の墜落の後、性懲りもなく又書き始めるのは忘却の美德ということか。

一対一では金輪際歯の立つ相手ではなくとも数を持つて当たればいいとこまで行けるんじゃないか？という着想を得たのは、先月、字数制限で掲載はできなかったものの、粗筋を記載した短編中の登場人物、引籠もりの長女と三女にピアノを弾かせるとしたらどんな曲が良いか、と東京在住の友人T子さんに相談したのが発端だ。

僕の友人には、粗野、無学、大酒呑みの人が多いが、これは日米共通しており、ほぼ漏れなく全員がそうなので、友を選ばない、とかいうことではないと思っており、どちらかという人を見る目がある、と云えるのではないか。その中で唯一変り種がT子さん。翻訳家で一流女子大卒の才媛、上品で大酒呑み。きつと何処かで呑んだくれていて、間違ってお友達になってしまったのだと思う。

この手の相談ができる知人は当然T子さん以外おらず、果たして芸大出のプロのフルート奏者、ウィーン在住のクラシック音楽通の御夫婦、といった僕の周囲には存在し得ない人種の方々に助言を乞うた様子。「幼児の頃から消えてなくなるような幽けさが漂い、事実朝陽の差し込む自室でピアノを弾いている様子を覗き見ると、輪郭がぼやけて半透明化するような錯覚さえ覚える」これを読んでバツと浮かんだのはヘンデル組曲のいづれか、例えば9番 BWV 439 辺りはどうでしょう、とか、バツハの平均律なら今日は姉が何番で妹は何番を弾いてるとか云えます。それに「平均律」の英語は “Well tempered” で、よく調律されている、という意味ですが、Temperament には気質という意味があり、というかこれが第一義で、“Well tempered” は「温厚」です。よって感情に絡めて物語ることができます、などというご提案をT子さん經由で戴いた。

僕はハタと膝を打ったね、「これだよ!」と。

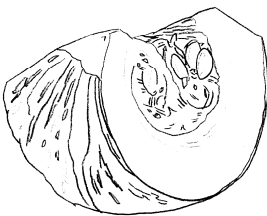
小説書きなど、所詮ネクラのひとり作業だと諦め、と

いうのは嘘で、実はじつとり薄暗がりでちまちまやっているのが性に合っているのだが、所詮それでは天才の真似すらできない。しかし今回のようにチーム・アブローチで行けば、知らない世界のことでも書けるではないか!と勇みかけたが、グーグルで検索しながら書く、なんていうのは、それに近いことをすでにやってるんですね。昔の人は検索エンジンなしによく物書きなんかできたな、と本当に感心する。天才の天才たる所以は小説のピースではなく、結構なんでしょうね。

しかし、近い将来、結構も含めて相談に乗ってくれる対話型創作AIなんていうのが出てきても全然不思議ではない。

当文学賞への応募は創作AI抜きで書かれたものに限ります、なんていうオリビックに於けるドーピング的存在になる日も近いかも……

pumpkin



十二年目のはなし



ドラメリア

(座敷わらし)

そのいじらしさというかなりふり構わない必死さにはほだされて、帰宅するその足で住宅会社に立ち寄り、猫を飼えるマンションへの引越しに取りかかった。今までの人生で最も思い切った決断だったと思う。

飼い始めてからはあつという間だった。住み替えた自宅は、坂を転がり落ちるように猫仕様と化した。猫の爪から壁を保護するシート、運動不足を解消するために階段状に配置した家具。私生活はほぼほぼ、猫で占められている。もはやニャンコ教からは逃れられない。……今回は、それだけの話。

六月で十二年になる。最初の猫を迎えると腹を決めてから。妙な表現だが、この時点ではまだ飼いはじめていなかった。出会ったのは、五月。近所のショッピンセンターの入口に住みつき、人懐こい仕草ですり寄ってくるので気になっていた。春は引越しの季節、恐らく捨てられたのだろう。こんな警戒心のない性格で危ない目に遭いやしないか。食べる物は十分にあるのか、……。

気にはなっていたが、その時点では飼うことまでは考えていなかった。生き物を飼うとなるとかなりの覚悟がある。行動も制限されるし、必要経費の問題もある。何より当時住んでいたのは、ペット飼育不可のマンションだった。この壁は高い。

あれこれ逡巡しているうちにその猫はどんどんついてきて、しまいには餌もあげていないのに膝に乗って甘えてくるようになった。思うに、あれが本人(猫)渾身の就活アピールだったのだろう。効果は抜群だった。

・編集後記……

すーちゃん(あきのさん)と久松山に登りました。市街を一望できて気分爽快。またあの景色を見たいけど、でも登るのは少し面倒。頂上までどこでもドアが通じていたらいいのに。

ドラメリア(編集長)

内沼晋太郎さんの『これからの本屋読本』NHK出版を「寄贈いただきました。『本好き』『本屋好き』を対象にしたカルトな文脈に圧倒されます。手書きノンプル「5」(ページ番号)で参加しています。

奈良敏行(発行人)